



県基幹種雄牛に4頭指定、良質な肉質が期待

ただみつやす さきはな としゅうふく かめはなくに

「忠光安」、「幸紀花」、「寿優福」、「亀花邦」が肉質や発育等の成績が高く評価され、新たな県基幹種雄牛に指定されました。

要約

研究成果の概要

1 背景・目的

青森県の和牛は、県基幹種雄牛（県が奨励する種雄牛）「第1花園」の能力が全国的に高く評価され、子牛市場で高値で取引されるようになりました。

その後、全国的に高能力な種雄牛が相次いで作出され、本県においても「第1花園」の能力を超える新たな種雄牛の作出が求められてきました。

2 内容

- 「忠光安」は、肉質だけではなく、肉量に秀でており、口どけの良い脂肪を生産する能力が高いのが特徴です。
- 「幸紀花」は、体幅が充実しており、特にめす子牛の肉質が優れています。
- 「寿優福」は、優れた霜ふり牛肉を生産する能力が非常に高く、青森県のエース種雄牛として活躍しています。
- 「亀花邦」は、「第1花園」の子どもで、肉質だけではなく、体型面にも優れています。

3 活用等

- これらの基幹種雄牛の凍結精液を製造し、県内を中心に供給しています。
- 「忠光安」、「幸紀花」、「寿優福」の子ども達は、県子牛市場に上場され、特に「寿優福」の子どもが多数取引されています。
- 「亀花邦」の子どもは令和7年から、市場に上場されま



上から順に「忠光安」、「幸紀花」、「寿優福」、「亀花邦」

関連情報

- 凍結精液は、JA全農あおもりを通じて販売しています。
- その他の県基幹種雄牛や能力検定中の種雄牛については、畜産研究所和牛改良技術部ホームページを御確認ください。（https://www.aomori-itc.or.jp/soshiki/nou_chikusan/）

畜産研究所 和牛改良技術部

Tel. 0173-26-3153

E-mail nou_kairyougijutu@aomori-itc.or.jp



青森産技

あおもりの未来
技術でサポート



その1 種雄牛とは？

和牛において雄牛は、ほとんどが肉用として去勢（子どもを作れなくする処置）後、肥育・出荷されますが、優れた遺伝子を持つ、ごく一部の雄牛のみが「種雄牛」として、子牛を生産するための凍結精液の供給に利用されます。

種雄牛の能力は、和牛の改良と生産者の所得向上に大きく影響するため、より能力の高い種雄牛の早期作出が求められています。

畜産研究所では、受精卵移植や最新の遺伝子解析等の技術を活用しながら、県や県内の和牛改良組合（生産者団体）と一体となって、県基幹種雄牛の作出に取り組んでいます。



「第1花国」



牛の受精卵

精液の活力検査

その2 種雄牛づくりの流れとは？

項目	子牛誕生	直接検定 (畜産研究所で実施)	種雄候補牛の選定	現場後代検定 (県内肥育農場で実施)				
				精液採取	精液配布	計画交配	子牛生産	肥育と殺*
種雄牛月齢	0か月齢	8か月齢 ← 112日間実施 → 12か月齢	県和牛改良推進協議会	22か月齢 (1.8歳)	23か月齢 (1.9歳)	24か月齢 (2.0歳)	33か月齢 (2.8歳)	63か月齢 (5.2歳)

※食肉にするために殺すこと

・直接検定

生後約8か月齢の種雄候補牛を畜産研究所で適正に飼育し、検定期間112日間の増体量、飼料摂取量、飼料効率等を計測します。

・現場後代検定

直接検定で選定された種雄候補牛の子どもを県内の生産者が肥育・出荷し、その枝肉情報をもとに種雄牛の産肉能力を推定します。

優れた種雄牛は県基幹種雄牛に指定されます。



直接検定牛の体の大きさを測定

🍷 コラム 開発よもやま話 🍷

畜産研究所では候補牛（直接検定牛、現場後代検定牛）を含め、種雄牛を30頭ほど飼育しています。

種雄牛は、体重800kg以上と大きく、取り扱いに危険を伴います。また、雄同士は闘争するため、群での飼育はできず、1頭ごとに単房（個別の飼育房）で飼育し、牛舎からの移動も1頭ずつ引き出します。

牛と人の事故防止のため、候補牛のときから、つなぎ運動や追い運動など調教を重ね、牛と人が互いに信頼関係を築くことで、効率的な凍結精液の製造につなげています。

これからも、種雄牛づくりの「技」で、県内の肉用牛生産を支えます。



種雄牛の引き出し